

011-11

国際医療救援部における新たな研修制度の導入

名古屋第二赤十字病院 国際医療救援部

○伊藤 明子¹⁾、山田 愛美²⁾、関塚 美穂³⁾、杉本 憲治⁴⁾

【はじめに】当院では国際医療救援拠点病院（以下国際拠点病院）の役割のひとつである人材育成において、2007年から「国際医療救援部付け研修生制度」を導入し、国際医療救援・開発協力（以下国際活動）要員に必要な看護実践能力の向上を目標に、院内外の研修を通して、国際活動要員の人材育成を開始している。このたび新たな国際医療救援部の研修制度を導入したので、ここに報告する。

【背景】2007年～2014年3月までに17名（院内10名、他赤十字5名、赤十字以外2名）が本研修制度を利用している。日本赤十字社管理研修サード受講時に、赤十字病院の看護部長を対象に、国際活動を志す看護職の人材育成の実態調査を実施した。自由記載では、人材育成プログラム作成に対する期待、人材育成の重要性、自施設での限界等の記載があった。この調査では人材育成の必要性は理解されているが、その具体策や語学力向上の支援が課題であることが明らかになった。国際活動要員のための集中英語研修は各拠点病院で開催していたが、2013年からは一拠点病院でTOEIC600～730の者を対象に2ヶ月間開催している。

【新設研修】既存の研修に加え、予科生研修制度と領域別研修制度を新設した。予科生研修では、国際活動要員に必要な看護実践能力国際ラダーレベルI・IIを習得及び英語力の向上（TOEIC550）を支援する研修制度である。また領域別研修は国際活動要員あるいはそれを志す看護職を対象に、自院では臨床看護実践の機会がない領域を、当院において研修生として学ぶ制度である。これらの研修生の受け入れは随時行なっている。

【期待と課題】語学力向上の目的で退職する看護職がいるが、予科生制度を導入することにより看護職の定着促進やキャリアアップ支援に繋がると考える。今後は看護職以外の人材育成・研修制度の構築が必要である。

011-13

国際救援活動をめざす会を立ち上げて

高山赤十字病院 看護部¹⁾、内科²⁾、医事課³⁾、臨床工学課⁴⁾、整形外科⁵⁾、外科⁶⁾

○竹原 美恵¹⁾、白子 順子²⁾、清水 保貴³⁾、古田 達也⁴⁾、細江 優子¹⁾、房原 篤志¹⁾、小池 玲⁵⁾、沖 一匡⁶⁾

【はじめに】赤十字の活動の一つである国際救援活動はよく知られており、当院からも過去に数回の国際救援派遣歴がある。国際救援活動をめざして当院に就職もしくは活動に興味を持ちながら日々働く職員も多いが、忙しい日常勤務の中、自分一人では救援についての知識や技術を得る機会は少なくモチベーションも保ちにくい。そこで当院では平成24年度から共に学ぶ場としての国際救援をめざす会を立ち上げた。

【活動の実際】会の活動は月2回勤務時間外に行っている。国際救援活動に興味のある職員を募り、職種は医師、看護師、事務職、臨床工学技士などすべての職種にわたっている。内容はメンバーで相談し決定するが以下を柱としている。1、国際救援要員として知っておくべき知識について（ERU基礎研修、IMPACT研修参加者からの報告、国際救援派遣経験者からの報告）2、国際救援要員に必要な技術（プレゼンテーション、ディスカッション等）3、語学力の強化（英語学習、英語でのプレゼンテーション、英文抄読会）

【考案】会の発足から1年以上がたち、参加者も増え、会の継続は個々のモチベーションを保持し知識を深める場として活用されていると考える。しかし多職種からなるメンバーで、勤務時間外の活動であることから参加に制約があることや、会の認知度も低い。今後は病院内外にこの会の存在を広め、周囲からの協力を得られるよう働きかけていくとともに実際の国際活動の場で活かしていけるスキルを身につけられる学習の場としての会の向上をめざしていきたい。

011-12

国際医療救援部における地域医療研修の学び～U病院への派遣を通して～

名古屋第二赤十字病院 国際医療救援部

○高橋 陽子¹⁾、関塚 美穂²⁾、伊藤 明子³⁾

【はじめに】北海道U郡U町は人口流出や少子高齢化などにより人口が減少し、高齢者人口は約25%、過去5年間の人口減少率は8.3%となった。地域の中核病院であるU病院では医療従事者の流出に伴う医療サービスの確保が深刻な課題となり、全国から看護師の応援派遣が行なわれている。当院はこの看護師派遣を地域医療を学ぶための地域医療研修として位置づけ、国際医療救援部研修生を派遣した。その活動内容と研修の学び、結果について報告する。

【研修概要】期間：2013年11月27日～2014年2月28日 目標：地域のアセスメント能力を高め、地域医療の実際を学ぶ方法：派遣前に研修計画を立案し、研修中は応援看護師として勤務した。関係部署の責任者と調整後、地域社会の問題や取り組みについて調べ、住民の声を聞いた。研修後には活動報告書を作成した。

【結果・考察】事前学習及び研修中に情報収集をし、コミュニティー・アズ・パートナーモデルを用いてU病院医療圏における課題を分析した。病棟では医師不足により看護師の役割を拡大し、看護実践が行われていた。常に医師がいる環境ではない中での的確な観察とエビデンスに基づいた看護の提供が求められていた。訪問看護では、病棟閉鎖に伴う在宅への移行が円滑に行われるよう地域連携を密にし、人々が地域で自らの健康を管理する能力を高められるよう支援していた。応援派遣を通じ、地域の現状を理解して環境へ適応することや地元の方との良好なコミュニケーションが必要であることを再認識した。応援派遣者は主に病棟で勤務するため、地域医療を学ぶには主体的に地域の情報を得ようとする姿勢が必要である。目標と計画に基づいて活動することで、国際ラダーレベルIIIで求められている地域アセスメント能力や対人関係の指標について向上を図ることができた。

011-14

連盟ロジスティクス部門～病院事務職員の専門職派遣～

大阪赤十字病院 医療情報課¹⁾、国際医療救援部²⁾

○河合 謙佑¹⁾、満島 順啓¹⁾、山井 美香²⁾、喜田 たろう²⁾、池田 載子²⁾、渡瀬 淳一郎²⁾、中出 雅治²⁾

【はじめに】人道支援組織におけるロジスティクスを「物の輸送」と一言で片づけるには少々難がある。スポットライトを浴びにくい分野ではあるが、その活動範囲は広く、高い専門性を持つ。例えば重要な任務である災害発生時の物資供給、これはあくまでロジスティクスの一つの過程であり、それを実現させるために多くの人材、時間、幅広い知識が日々費やされている。

マレーシア・クアラルンプールにはアジア大洋州ゾーン（以下、APZ）を統括する連盟オフィスがあり、ロジスティクスユニット（以下、ZLU）では、赤十字のロジスティクス分野の向上を目的に各国からトレーニー要員を受け入れている。演者は2013年11月から9ヶ月間このポストへの派遣の経験を得たので、その活動を報告する。

【活動内容】ZLUは物流管理、各国赤十字社物流部門の開発援助、物資調達、車両管理の4部門で構成されている。演者は主に物流管理及び開発援助の分野に携わった。物流管理ではAPZ内での災害対応およびその備え、連盟倉庫の管理、備蓄物資の管理、これらに関する関係各署とのレポーティング等を担当し、連盟ロジスティクスのシステム習得に努めた。開発援助ではその一つにバングラデシュ赤新月社の倉庫改善事業を担当した。現場にて事業の立ち上げフェーズから携わり、課題や事業の有効性ならびに将来性を関係者と共有し合いながら、一つひとつのプロセスを推し進めた。

【おわりに】オフィスならびにフィールドにて幅広い経験を得ることができ、今後もロジスティクス要員として国内外での活動に励みたい。また、「事務職員の専門職育成」および「病院事務職員の長期派遣」についても関係各署と連携を取り、検討をしていきたい。